

---

**好きでごめん。**

美樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

好きでごめん。

### 【Nコード】

N1858C

### 【作者名】

美樹

### 【あらすじ】

どうして好きになったんだろう？あんなにも嫌いだった人が・・・  
迷惑かけてごめん。好きになってごめん。

## 出会い

初めての制服。

ほとんどの人が同じ中学校なので卒業式、感動と言つものが全くなかった。

『行って来ます!!』

ダサくて今にも改造したくなる制服なのに、胸をドキドキさせながら目的地の学校まで走っていった。

校門の前でクラスわけのプリントを受け取った。

自分の名前と小学校の時から仲のいい川口美末かわぐち みみの名前を探した。

美末とは同じクラスだ。

初めての学校で迷子になりながらも、やっと自分のクラスC組にいた。

初めて見る子やもう小学校の時から見慣れた子がいてにぎやかだった。そんな見慣れた友達からあいさつされた。

「美樹、おっはー!ー!ー!ー!」

『おっはー!ー!ー!ー!』

アタシの名前は平野美樹ひらの みき

それはどうでもいいとして、自分の席を確かめた。

『うわっ・・・最悪・・・』

運悪く、1番前の席

「お！前じゃーん！」  
からかうかのように美未が言う。

『「こやだ！授業中眠れないじゃん！」』

「でも、3日間だけだって！」

『なにが？』

「3日たったらずぐに席替えするんだって！」

『やったじゃん』

こんなアホらしい会話していると隣からいすの音が聞こえた。  
アタシの隣の子は佐田さた亜谷あやめ女と言う女の子。

見た感じ暗くて、小学校の時いじめられてたらしい。  
前髪が顔にかかってて、目をよく見る事ができない。

とにかく、友達になりたくないタイプだ。

「おはよ・・・」

いきなり佐田亜谷女にあいさつされて目が驚いてるまま、

『おはよー！』

声が裏変っちゃった・・・

「入学式があるので廊下に並んでー！ー！ー！」  
先生ナイスタイミング！

廊下に並び、美末が先生の目を盗んで話しかけてきた。

「担任の先生、おもしろそうだね。」

『でも、女の人じゃん』

「女の先生でもいいの！あ、もしかして期待してたの？」

『はいはい。ありえないからね』

「A組とB組みの先生はどんな人かな？」

『ああ、さつき見たらオバサン先生とオジサン先生だったよ』

「なーんだ、中年コンビか！」

いや、美末の方が期待してたと思うよ！

落ち込んでる美末をみながらため息を深くついた。

さつきから佐田亜谷女に見られてる気がする。

なぜなのかは分からない。

佐田亜谷女とは初対面のはず……

長い入学式が終わり、先生が教室から居なくなった途端おしゃべり  
タイムスタート！

「美樹次の時間は何するんだっけ？」

『分からない。プリント出すのもめんどくさいしな・・・』  
アタシはチョーめんどくさがりや。

「つ・・・次は作文だって！」

佐田亜谷女が話しかけてきてアタシたちは驚いた。  
多分クラスの皆がこっちに注目してる気がする。

そんな空気は破るかのように美末が問いかける。

「佐田さんだね？あだ名とかある？なんて呼べばいいかな？」

「亜谷女でいいですよ。」

「佐田亜谷女？可愛い名前だね！」  
嘘つき！最初から知ってたくせに！

美末の褒め言葉に佐田亜谷女は顔を赤らめた。

「私は川口美末！そのまんま美末って呼んでね！」

「あ、はい」

「で、この子は平野美樹。みんな美樹って呼んでるよ」

は？え？へ？美末のバカ！

それって遠まわしに友達になれって言ってる事じゃん！やだし！

「よろしくお願いします。」

『あ、亜谷女とアタシたち同い年だしタメでいいよ。』

美末が口をポカンと開いてた。そしてその口を動かさず、

「え！いきなり亜谷女？みんちゃんの図々しさにびっくり！」  
クロス

『うるさい！』

隣では亜谷女が笑ってた。・・・結構可愛い。

「あ・・・美樹・・・」

『は～～い？』

「これから友達ってことでいい？」

本当は気がならないけど

『いいよ！友達×2』

ここである異変に気がついた。

美末が紹介したのに亜谷女は美末と友達になろうとしない。

亜谷女は美末のにかに気づいたみたい・・・。

2年間ともに過ごしたアタシでさえ美末の秘密が分からないのに、  
たった30分美末といた亜谷女が気づいた。

この女ただ者ではない。

下校時、亜谷女と帰ることにした。

好きな人の話とか・・・メアドを交換したり。

とても明るく、いい子だったのですぐに仲良くなれた。

「じゃ、アタシの家はここだから！」

『え！近いね！あとでメールちょうだいね』

「うん！美樹バイバイ！」

『バイバイ！』

なんだ、明るいじゃん！とてもいじめられたりは見えない。

この席でしゃべる最後の会話。いつもより会話がはずむ。

「美樹は好きな人いないの？」

『いないよー！亜谷女は・・・他校の子だよね？』

「うん・・・／／／」

亜谷女は他校に好きな人がいるらしい。今のところ片想い。

『そろそろ席替えだね・・・』

「うん」

最初は最悪だった席が今になるとこの席が最高に思える。また亜谷女と近くがいいな・・・。

この日、1時間以上おしゃべりを続けた。

## コンプレックス

待ちに待った席替え。気合を入れてくじを・・・

『おっしゃー！ー！後ろのほうじゃん！ー！』

「うしろが好きだね・・・」

咲樹と亜谷女が呆れた顔で言う。

『だってさ、だってさ、いろいろいいじゃん！ー！』  
3人で騒ぎながら新しい席についた。

新しい席で気になるのは当然隣の子。今回は男子だ。うしろの男子と楽しくおしゃべりしてる。

咲樹とは席が離れてしまったけど、亜谷女とは結構近い。

・・・なんて事を考えてたら、隣からトーンの低い声で何かを言われた。

「お前・・・怖いな」

『え？』

え、どうゆうこと？てか、「よろしく」は？

「目つきヤバイからー！ウケる〜！」

『初対面でソレですか？よろしくはないの？』

「よろしく。こわーい！」

よろしくはサラッとすませ、目つきトークが始まった。

『あんだ名前は？』

「はらだ かずき原田和樹お前・・・美樹だろ？」

『なんで知ってるの!?!』

「周りの奴らがそー言ってるじゃん!アホか！」

『アホ?じゃあ、あんたはバカだよ!』

「お前に美樹って名前はもったいない!俺があだ名をつけてやるよ  
」!

『え?本当に?』

何故か期待してしまう。

「お前目つき怖いから魔女！」

『はあ?』

期待したアタシがバカだった・・・

「じゃ、これから魔女って呼ぶから！」

『もーだめだ・・・死ぬ』

「魔女でいいですか？」  
いかにも、嫌味だ

『好きにして』  
この事がキツカケでアタシの目はコンプレックスに変わってしまった。

今までは目がつってて、みんなに羨ましがられてた。  
美人目だから羨ましいと……

原田和樹のコンプレックスらしきものを探してみるけど……  
顔は文句のつけどころがない。

手足も長く痩せている。  
足なんか長すぎて制服のズボンが上がって靴下が丸見え。素肌が少し見える。

欠点と言ったら……

『天パ？』

これしかないが、アタシは天パの人が好き。いわゆる、天パフェチ？  
こんなアタシが天パと言ってからかう事はとてもじゃないけど出来ない。

「ねえ、美樹」

『なに？ 亜谷女』

「原田さんと仲いいよね？」

『仲いいどころか、最悪だから』

「原田くんに惹かれたりしない？」

『ありえない!』

絶対にありえない。

うちの性格は……

ワガママ

自己中心的

気が強い

生意気

強情

2重人格

気取りや

最悪なパターンが固まってできた人間だ。そんなアタシが一目ぼれなんて死んでもない!

「でも原田くんっておもしろいからいいよね？」

今日の授業中、あいつの発言や行動で何回も皆の笑いをとっていた。

『まー、おもしろいのは認めるけど……』

「……言ってたよ!」

ハメられた

『だ……誰が?』

「美未が」

『え！美未が？意外だな・・・』

「なんで？」

『だって、美未彼氏いるもん。しかも、その彼氏にゾッコン！』

「本当に？美未が？」

『うん。付き合い始めたばかりだよ』

「そうなんだー」

彼氏

「美樹!!!」

いきなり亜谷女が興奮気味に走ってきた

『どうしたの?』

「両思い!!!」

『え?』

「コクられたの!両思いだよ!」

『本当に?良かったじゃん!』

「うん!なんか、好きだよって言われたの!」

『おお!じゃあ、カップルってやつ?』

「私に彼氏ができたんだあゝ・・・」

『アタシの身の回りはカップルでにぎやかだね・・・』

「美樹にもいずれ彼氏が出るよ!」

『そーかな?』

「人はいずれはできるもの!そのチャンスを逃すから彼氏が出来ない人がいるの!」

朝からハイテンションな亜谷女についていけず、1日中ボーッと  
・できるかぁ！！！！！！！  
隣にはあの・・・原田和樹！

「魔女！お前の目はどうした!？」

『魔女だからつつてるに決まってるでしょ  
話す話題は目。』

『あんだ、目のことしか言えないの!?!』

「んだよ！自分の欠点を素直に認めるよ！  
ケンカの原因も目。」

それがたとえ、授業中でも、給食中でも、掃除中でも・・・  
かなり疲れる。精神的に・・・

『かずはこれどうすんの?』

「えっと・・・こうしたけど？魔女は?」

『アタシはここをこつやって・・・』

席が隣だからよくしゃべる。

みんな原田のこと「かず」って呼んでる。

かずはアタシの目が怖いから「魔女」って呼んでる。

ただそれだけで今付き合ってるって噂が流れてる。

いや、ありえないから！

アタシが？かずを？？ないない！

かずは恋愛対象外だ！

## 部活

噂がかなり流れて疲れている中、新入生に嬉しい知らせが入ってきた。

それは、部活の手紙！部活動は・・・

吹奏楽部

演劇部

英語部

男子バレー部

女子バレー部

男子テニス部

女子テニス部

陸上部

バトミントン部

水泳部

サッカー部

野球部

「美樹はどここの部活に入るの？」

目を輝かせながら、亜谷女が話してくる。

『アタシは・・・バトミントン部！』

「そうなの？なんで？」

『わかんない。直感で！』

「私は水泳部だよ」

『地味だねー……』

「水泳苦手だし……」

『演劇部とかは？』

「死んでもヤダ！」

『でもさ、ほとんどの人が吹奏楽部とかバレー部とからしいよ』

「うーん。でも、活動が厳しいんでしょ？」

『大変だね……』

話が終わり、席についた。

「魔女！お前なんの部活に入る？」

『アタシはバトミントン部だよ かずは？』

「え！バトミントンって格闘だったっけ？」

『はあ！？お前殺すよ』

「嘘だよ！俺サッカー部」

『サッカー？足に筋肉つけすぎて身長縮むなよ？』

「なんだと！？そつちだつてラケット振り回しすぎて頭蓋骨複雑骨折とかやめるよ？」

『はいはい、ありえないから』

「お前体験入部にすんの？見学にすんの？」

『見学！体験とかめんどいし・・・』

「じゃあ、俺も見学」

『そう？じゃあ、あとで先生に言おうよ！』

「OK」

休み時間

「・・・と、ゆーことで見学します」「

「失礼しました。」「

「おい、魔女」

『ん？』

「先生の中で1人変な先生いなかったか？」

『プツ！なにそれ！』

「増田先生だったような・・・キモイ・・・」

『まーまー・・・教室まで競争する?』

「よーいどん!」

『はやつ!』

なんかドキドキする。なんで?あいつの事が好きなの?ない!ただの友達!

「はい!俺が先に教室についたぞ!」

『ある意味ズルしなかった?』

「お前が遅いんだよ!」

## 見学

運悪く今日見学するのはハラとアタシだけだった。部活動は違うけど説明は全員一緒らしい・・・体育着に着替え、ハラもいる・・・けど、周りからの視線が痛い。そりゃそーだ。普通男女2人で一緒に体験入部するのはあまりない。あつたとしたらカップルしかない。ハラは・・・当然嫌がつてる。

アタシは当然この性格からしてガマンできない状況だ。

なので・・・体験入部なんてしないでコッソリ逃げ出した。なんて、無責任なんだろう・・・。ハラ、ごめん。

次の日

「美樹！彼氏いるじゃ〜ん」

『は？いないよ・・・』

「え？学校で噂流れてるよ・・・」

『なんの？・・・かず？』

「うん。かずと付き合ってるの？」

『バカじゃん？アタシがかずと付き合うわけないじゃん！』

「だってさ、昨日2人で体験入部したから皆てつきり付き合ってるって思ってるよ！」

『うわっ、最悪・・・』

学校に行ったら、案の定・・・

「美樹！かずといっつき合い始めたの？」

「美樹！かずとは初対面じゃなかったの？」

「美樹！早速ラブラブ？」

ウザイ。いい加減にしろ

その日から噂が絶えなく、結局アタシはバトミントン部には入らず、危険回避のため美末と同じ英語部に入部した。

かずには無視されてるしね。別に構わないけど・・・



## 悪縁

一時期ものすごい噂もあったけど、（今もそうだけど）  
かずとアタシの関係は相変わらず・・・

「魔女！そろそろ席替えあるらしいな！」

『え！早くない？』

「てか、お前と近くの席やだ」

『アタシだつてかずと近くの席なんてやだよ』

「じゃあ、2人の席が離れる事を祈って！」

『かんぱーい！・・・って、どこにグラスあるねん！』

「はい！魔女の1人芝居終了~~~~」

『かず！！！』

そして迎えた席替え。

神様お願いします！どうか、どうか、かずと遠い席にして！

「美樹！真ん中？」  
と、亜谷女と美未。

「かず！真ん中？」  
と、男子グループ。

超超超ちよーーーーー！最悪……………！！！！！！  
今回の席替え……………、  
またかずと隣だ……………

『え！かずそこなの？』

「魔女じゃん！最悪……………」

『分かった！席替えの前に近くがやだつて言ったじゃん！』

「あつ！だから、隣なんだ……………確かに近くじゃないな……………隣だ  
な……………」

『神様の意地悪……………』

「俺も同じ……………」

また、くつついた。これぞ悪縁。てか、悪縁以外の何者でもない！

でも周りからは・・・

「縁があるんだね」

「さすがカップル！」

「ヒューヒュー」

いや、悪縁だから！しかも、付き合っていない！！！！

こんな奴大嫌い！この席でも相変わらず・・・、

ケンカケンカケンカケンカケンカ&毒舌バトルが続く・・・はず

## 女嫌い

いつもと変わらない毎日を送っている美未、亜谷女、アタシ。

ところが、亜谷女が・・・

「美樹・・・私、彼氏と別れちゃった・・・」

『え？彼氏と？』

亜谷女の彼氏とは、ずっと片想いだった他校の男の子。

亜谷女はその男の子の事がすごく好きだったけど、何で？

『ちよつと待って、なんで別れたの？』

「理由が2つあって、1つは遠距離恋愛だから嫌だったの・・・」  
アタシたちは東京に住んでいて、他校の男の子は青森に住んでいた。  
そりゃー、遠距離恋愛になるわな・・・

『もう1つは？』

「・・・女に興味がないんだって」

『はあ？じゃあ、なんで好きって言ったりしてたの？』

「てか、メールもくれないんだもん」

『メールもくれないの？』

「うん。付き合ってた5ヶ月1通もメール来てないの……」

『1通も!?!』

「うん。だから私から別れた」

『……それでいいんだよ!』

「うん」

こうして、亜谷女の初めての恋は別れを告げた。

……にしても、アタシにいつ好きな人が出来るの? いい加減出来てもいい時期じゃない??

『かず!』

「んだよ、魔女!」

『かずは好きな人できたの?』

この質問で周りのいた男子が集まってきた。

『え?なに?なに!?!』

「かず、向こう行ってる」

『この質問ってヤバイの？』  
男子がかずに聞こえないよう用心深く理由を話した。

『・・・そうなんだ。じゃあ、好きな人が出来るわけないね！』

「これから気をつけてよ〜平野さん」

どうして、かずにこの質問をしちゃいけないのか・・・それは、

かずはものすごくの女嫌いだ。

今もこうやって、かずがアタシに話しかけてるのがとてもめずらしいと言う。

女嫌い。

強情。

デリカシーがない。

消極的。

笑い方おかしい。

ウザイ。

恥ずかしがりや。

シャイ。

すぐに悪口を言う。

かずはこんな性格なのだ。

ここまでなったら、女子にも嫌われてるし、かずも女子が嫌いだから、どうでもいいらしい。

だから「好きな人いる？」とかの質問すると、怒って適当に女子を選び悪口などを言っつて、女子を泣かすらしい・・・

そこまで女子が嫌いか？じゃあ、なんでアタシと話すの？

長かった1学期も終わり、夏休みが終わったら席替えだ。  
今度こそハラと離れたいなあ・・・

## 夏休み

夏休みが始まった！楽しい夏休みのはずが……

夏休み中、亜谷女と大ゲンカしてしまった……最悪な夏休みだった……。

ケンカの原因は不明。ただ、小さい事で争ったのは確か……

夏休みが終わり、早めに学校に行った……んだけど、教室には亜谷女がいた。たった1人で。もちろん2人とも無視。

アタシの性格は絶対に自分から謝らない！いくら自分が悪くても謝るもんか！！！！

「おはよ」

『おはよ』

「バイバイ」

『じゃね』

今日の亜谷女との会話はこれだけ

でも、友達はまた作ればいい！自分からは謝らない！落ちてるものは拾わない！それがアタシのモットー！！！！ほんとっ、性格悪いな……

席替えの日が近くなるたびにだんだんと亜谷女とアタシの仲が良くなってきた。

今では前よりもベツタリくっついてるアタシたち。これぞ自然体の力！？

亜谷女がこのクラスで好きな人が出来たらしい。これも自然・・・  
その好きな人とは・・・川野<sup>かわの</sup> 拓哉<sup>たくや</sup>アタシは好きじゃないタイプ。

川野拓哉は女子にモテモテで、背が高い方。頭もいいし、スポーツも出来る。顔も・・・いいんじゃない??

しかも、おもしろいからおもしろさはかずと1位2位を争うほど?

(実際は争ってないけどね・・・)

亜谷女はハードルの高い方を選んでしまった。当然女子にモテモテ  
つてことは、ライバルも多数。

最近になって亜谷女はクラスの女子から無視をされ続けている。や  
っぱ、モテモテの男子を好きになるとキツイわ・・・アタシもか  
ず  
に無視されてる。また、いつもの噂が流れてるから?その噂は  
大分  
収まったはず。なぜ?

別にいいんだけどね

## 本性

亜谷女の好きな、川野拓哉。アタシは川野と呼んでいる。みんなは拓哉と、呼び捨てだけど……

そんな川野の本性が最近分かってきた。

それは、ものすつごくエロイ事！しかも、ナルシスト！疫病神！支配人！キス魔！

アタシより性格が悪い人なんていたんだ……

しかも、女子にはモテないそうだ……全く嫌われているらしい……

それも知らずに、川野は「女子はみんな俺のものだ！」と、思い込んでるらしい……

なのに、なんで亜谷女は無視されているのだろうか……？

また、美末の本性も分かった。それは、1ヶ月前のこと……

「美末！アタシも好きな人できたよ！」

「亜谷女も？誰？」

「拓哉なの！」

「え！あのモテモテの？」

「拓哉ってモテてるの？」

「そつらしいよ」

このときただポーツと2人の会話を眺めていた。そしてその3日後、美未からメールが届いた。

【美樹、亜谷女に言わないでね・・・】

【うん。どうしたの?】

【私、川野くんに告白されちゃったの・・・】

【えー本当に?すごくない?】

【すごくないよ・・・でも、平気!私は好きじゃないって送ったから!】

【なら、平気じゃん?】

本当に平気だと思って、亜谷女にこのことを話した・・・そしたら、亜谷女が美未本人に言ってしまったんだよー!!

「ねえ美未、本当に告白されたの?」

「ああ、知っちゃった?うん。そうなの」

「で、OKしたの?」

「あ、してないよ!だから、私は川野くんと話さないから、亜谷女

が頑張ってね」

結果、話さないわけない！美末は川野くんにはベツタリ！女子の前では普通だけど、男子の前だと……

「やだぁー！返してえ〜」

「川野くんだったら、い・じ・わ・るう〜」

「ああ、ずつるう〜い」

「美末もお、食べたいなあ〜」

ハッキリ言っている？キ・モ・イ

なんで、今まで美末の本性に気付かなかったんだろう……？

案の定これじゃ、女子に嫌われるよ……実際ものすごく嫌われてるけど……

亜谷女は最初からこの本性に気づいてたらしい。

「あれは、絶対裏表あるもん。最初から分かってた」  
さすが、亜谷女！

ある日

この発言に女子はとうとう堪忍袋の糸が切れた

「川口さんってさ、女子に嫌われてない？」

「いいのぉ！美末はぁ、男子にモテモテだからぁ女子が美末のことヤキモチやいてるのぉ」

なに？この発言。

亜谷女が拓哉からメールが来たらしい。そして、

【拓哉さ、美末にコクったの？】

【は？コクったわけないし】

【コクってないの？】

【するわけないじゃん。てか、川口ってキモイし】  
美末は思いつきり川野さんに嫌われてる。

アタシは、美末のお気に入りの男子にメールした。

【いつも美末にベツタリされてるよね？】

【あれ、チヨーうざい】

【あ、うざいの？】  
当然うざかってる。

美末は男子からも女子からも嫌われている。これはすごい！？  
特に亜谷女は美末が大嫌いだ！好きな人を奪おうとするから……

## 目覚め

美未との関係が崩れ落ちてから1ヶ月。待ちに待った席替えだ。

「美樹！好きな人ができても、美未に言っちゃだめだよ！奪おうとするから！」

『好きな人って、まだ出来ないんだよなあ・・・』

「まだなの！？」

『そりゃそーだろ・・・』

「かずは？」

『オエツ！吐く！ムリムリ！！！！』

「そんなに〜？」

『当たり前じゃん！あいつのことが好きな奴は顔見せろって感じだし〜！』

「平野さん！早くくじ引いてください！  
イライラ気味で言う学級委員。」

今日の席替えで亜谷女は不機嫌だ。アタシはいい席だったけど・・・

アタシと川野くんが同じ班。美未と亜谷女とかずが同じ班だったから。

「いいなあ、美樹席代わってよ！」

『無茶言つな。でもかずと離れた！』

「教室の端つこと端つこだもんね」

『今回はいい席だぞ』

「美未が残念そうだった」

『なんで？』

「そりゃ、拓哉と離れたからでしょ？」

『でも、美未って彼氏いるのに川野のこと好きなの？』

「すっげー男好きじゃん！」

『亜谷女怖いなあ・・・』

うちの隣の男の子は美未のお気に入り男子。かずが隣だった時にぎやかだったけど、今はすごい静か。

そのかわり、川野が盛り上がらせてくれる。けど、イマイチ・・・なんだろう。

この気持ち・・・

「それは、恋だよん」

『は？亜谷女、殺すよ』

「そうなんじゃないの？今までかすが近くにいたのが当たり前だと思ってたんだけど、急に離れて、寂しくなった！・・・違う？」

『ま、確かに変な違和感があるけど、近くにおもしろい人がいないからじゃないの？』

「拓哉がおもしろい人じゃん」

『待つて、しばらく考えて見る。』

アタシがかずのことが好き？ないない！ありえない！あんな奴のどこがいいって言うの？あんなに嫌いだったのに・・・今更喜欢き？うちも軽くなつたなあ・・・

「かずの事好き？」

亜谷女もしつこくなつたな・・・

『分かんない。たぶん気なってるだけかも・・・』

「好きってことじゃん？」

「え！！！！美樹、原田くんのが好きなの？」

終わった・・・美未が来た。

「聞いてたの？」

いや、亜谷女怖いから！

「うん 聞いてたよ！原田くんが好きなんだ〜・・・」  
満足気に言うと美未はかすの所に言った。

「美未なにするつもりなんだろう・・・？」  
美未に続けて亜谷女も行ってしまった。

『うちも行くわ・・・』  
あれ？行けない？なんか、恥ずかしくなってきた・・・やっぱり好きなのかな？

## 邪魔

「美未、最悪！」

亜谷女が不機嫌な顔で帰ってきた

『どうしたの？』

「さつき、美未がかずのところに行ったじゃん？その時、かずにブリッコして、班でやらなきゃいけない課題を2人きりでやってたんですけどー！」

『は？じゃあ、その時かずは？』

「すっごい嫌そうなお顔だった。ほら、かずつてすぐ顔に出るから分かりやすいよね」

『顔に出るっけ？』

「うん。バレバレ！」

その日は美未がそれくらいにすんだのが良かった。美未はかずと席が近いから……

「かず、この下敷きよくない？」

「この前見たけど、結構よかったよ。今度買っか迷ってる」

「そう？私も買おっかな？シンプル系が好きだし」

「お前もつと可愛らしいの買えよ」

「黙れ」

「……って会話してたのね、そしたら次の日美未がその下敷き買ってきて、知らずに次の日ハラも同じ下敷き買ったの！ようするに、美未の盗み聞き！」

『その話持ち出したの亜谷女だし、亜谷女はその下敷き買ったの？』

「買ってないし！で、かすがなんで持ってるの？とか、言って怒り気味だったよ」

『そうなんだ』

「あ、ある日はね……」

「おい、この色は？」

「青」

「青ない。」

「じゃあ、美樹に借りれば？かなりペン持ってるし」

「分かった」

「あ、原田くん！」

「あ、あ？」

「その色はあ、青じゃなくて緑のほうがいいんじゃない？」

「は？」

「ほら！緑は美末、持つてるからあ！！！」

「じゃあ、借りる」

「美末の隣で作業してっ そのペン大切だからあ」

「・・・」

「美末うざくない？」

『うん・・・』

「あ！亜谷女と美樹だ」

『あ、美末聞きたい事あるからこっちきて』

「ん？亜谷女、美樹どうしちゃったの？」

「さあ、自分で考えれば？」

『この前、アタシがかずのこと見てないのに、かずがキモイとか言  
つてたの教えてくれたよね?』

「うん」

『詳しい事言ってくれない?』

「いいよ あのね・・・」

「あ、美樹がかずのこと見てるよ」

「はあ? いい加減迷惑なんだよ」

「原田くん、手伝って」

「キモイし・・・」

「こんな感じだったけど?」

『そう? 美未ありがとう』

『で、亜谷女教えて』

「いいの? あのね・・・」

「ああ！美樹があ、原田くんのこと見てるう！」

「美未、美樹別に見てないじゃん」

「見てるつてばあ！」

「はあ？いい加減迷惑なんだよ」

「だよねえ……」

「キモイし……」

「こんな感じなんだよね……」

『美未と違つ』

「そりゃ、美未が嘘に決まってるじゃん。美未も本当のこと言います  
「き」

『やっぱり1学期のこともあったから、嫌われてるのかな？』

「……違つよ！咲樹が邪魔なだけ！」

そう言つと亜谷女は、美未はきつく睨んだ。

美未は他の男子と話してたから気付くわけがない。

## 亀裂Ⅱ意識

美末のせいで、最近前よりずっとかかと距離が遠くなった。少しずつ亀裂が入った感じ。亜谷女はと言つと……

「拓哉超うざい。」

『え？どうしたの？』

「なんか、今まで好きって言つのが不思議なくらい嫌いになった！」

『ああ、あの性格ね……』

「うん！あんな奴大嫌い！そもそも、メールが来た時点で終わってたから！」

川野は極度の女好きだから、学年のほぼ全員のメアドを知っていて、毎日のようにメールしている。

確かに亜谷女が嫌いになるのも無理ないな……亜谷女がかわいそう……

アタシとかずはと言つと……話さないし、話しかけない！それだけ！

席が急激に遠くなってからか、お互い意識し始めたらしい。でも、その気持ちはお互い気づいてない。当たり前だろ！アタシはかずに嫌われてると思う……

ある日

「美樹とかずなんで話さないの？」  
いやらしそうに聞く女子。

「2人でイチャイチャしゃがって……」  
隣にかずがいるんですけど……超うざい！  
なんか男子はいつの間にかツラの話になった。女子はそれを聞いている。

「お前がカツラだろ！」

「はぁ？お前だし！」  
かずと男子が言い争ってしまった。

『え！？かずつてカツラだったの？？？』  
うちってバカだよなあ。普通こんな質問するか！

「そんなんだよー、かずはカツラなんだよー……」  
その瞬間……ハラ泣いちゃったあ……カツラがそんなにシヨツクかあ？  
うちはそんなバカじゃないから信じるわけないじゃん！

かずは先生にアタシの事と、カツラの事をチクツタ。  
当然男子と女子が怒られた。そんなにアタシの事が嫌いなの？もうこうなったら両思いなんてありえないんですけど……

てか、亜谷女に相談したら……

「好きだからじゃないの？」

『いや、意味不明だから』

「恥ずかしいからじゃん？それと、美樹に自分がカツラってこと思わせたくないんじゃない？」

『そうかな？いかにもアタシが嫌い！って感じなんですけど？』

「でも、2人ともいい感じになってきたし、平気なんじゃないの？」

『いや、亀裂入ってない？』

「入ってないから・・・私たちの方が入ってるから・・・」

確かに、最近亜谷女は川野の事かなり嫌ってる。

確かに、最近アタシたちはお互いの事意識し始めてる。

そんなこんなで冬休みが始まった。1年生でいられるのも後わずかやだなあ。2年生になるなんて・・・クラス替えあるし・・・最近気になったけど、先生やけにかずの事嫌ってるっぽい・・・まあ、ハラの状態が悪いからね・・・

授業中うるさい

なにかと問題起こす

廊下・教室を走り回る

言動がバカ

なんで好きになったの？自分がおかしい。てか、攻めたい・・・

亜谷女がかずのメアドを入手したらしい。かずは女嫌いだから自分の携帯のアドレス帳に女子のメアドが1つも入ってない。

入ってる女子は相当すごい！てか、絶対彼女だ！

・・・彼女すら入れなさそう・・・

ああ見えて結構シャイだから・・・そんなかずのメアドを入手し  
てかずにメールしたら、

【駄目】

【無理】

【やだ】

【うん】

【は？】

しか返事が来ないだそうだ・・・あ！いいこと思いついちゃった！  
いいことかな？

【ねえ、亜谷女！かずに美樹がかずのことが好きだったらどうする  
？って送ってみて】

【いいよ〜】

【どうだった？】

【俺は嫌いだって・・・】

【嘘って送って・・・】

【あっそだって】

【どこが嫌いか聞いて】

【性格だって】

【性格？】

【ま、らしいよ】

【やっぱり嫌われてんなあ・・・】

【ま、性格だけだから頑張ったら？】

【そだね】

やっぱり聞かなきゃ良かった・・・性格かあ、確かにアタシの性格激悪だもんなあ・・・

そりゃ、かずが嫌いになるのも無理がない。

もう、こうなっちゃうと本気で好きになっちゃうじゃん！なにがなんでも手に入れてやる！



## 進展

冬休みも無事終了。

3学期のスタート。

アタシがかずの事好きになって……どのくらい経った？……  
忘れた。

学校に行き、いつものように授業してる。毎日同じだけど最近なにかが少し違う。

それはかずが1番前の席でアタシが1番後ろの席。

授業中後ろを向いたり、横を向いてしゃべるのは目立つ行動だ。しかも、1番前の席の人は特に目立つから授業中ソワソワ出来ない。なのに、ハラときたら……授業中やたらアタシのほうを向く！いや、あんたそんな事しちゃって……ハッキリ目立つよ！！そんなにアタシの目が怖いか！

ええ、そうかそうか！

「ねえ、美樹好きな人いるでしょ？」

うちのクラスで1番気が強い女子が話しかけてきた。名前は上原香かほ夏子なつこ

ある意味友達

「好きな人？いないよお」

「いや！美樹絶対恋してる！見てて分かるもん！」

さすが、鋭い……

『いや、本当に好きな人いないから』

「いるでしょ？誰にも言わないから！教えて！」

『ええ……』

「かずでしょ？」

『は？……／／／』

「顔赤くっ！いやっぱかずなの？」

『……うん』

「両思いじゃん！」

『え？なんで？』

「なんか授業終わったあと、拓哉がかずにあの人は順調か？って聞いてて、かずがちげえーよって照れながら言ってるんだよ！」

『気のせいじゃないの？』

「全然！だってさ、かずは1番前の席なのにしょっちゅう後ろ向いてるじゃん！」

『……確かに』

「それって、美樹のこと見てるんだよ！もう、バレバレ」

『って、言われたんだよねえ……本当に両思いなの？亜谷女はどう思うっ？』

「え、私も両思いだと思う」

『亜谷女まで？』

「だって、ハラバレバレな行動とりまくってるじゃん」

『ええ……？そうかな？』

「かずも美樹も鈍感すぎる！今頃だとお互いの気持ちに気づくはずなんだけど……」

『アタシ全然分らない！！』

「ほら、かずって恥ずかしくなると舌出すクセがあるじゃん」

『あ、みんなの前に出る時たまたま出してる！』

「美樹の前だと、必ず出してるよ？」

『そこまで見てない……』

「あ！かずだ！」

『本当だ！逃げる！』

「お待ち！逃げてどうするの？」

『そっか……』

「今日は日向と帰るのか……」

日向大樹ひなた だいきかずの1番の友達。  
男のくせに超可愛い

『アタシたちも帰ろうよ』

「そうだね。日向とかずじゃあねえ」

「あ、じゃあね」

「ちよっと！かずは？」

「……」

やっぱり無視か……

「美樹もバイバイって言うってみて！」

『え？……日向くん、かずじゃあねえ』

「あ、さようなら」

やっぱり返事をしたのは日向くんだけ

「・・・／／／」

え？ええ？かずの顔赤くない？気のせい？

「ね、美樹！かずの顔赤かったね！」

やっぱ気のせいじゃない・・・

『そ・・・そうだったけ？』

「しかも、舌チヨロツて出してたじゃん！」  
それは見てない

『そうだっただけ？』

「かずってみんなの前に出るより美樹の前の方が恥ずかしがってるよ」

『そうなんだ・・・』

「これは絶対両思いだった！」

うちはそうに見えない。不思議と否定したい・・・

「美樹はバレンタインどうする？」

今日は2月6日そろそろバレンタインだ。

そうだなあ、今年は誰にもあげないってことでいいかな？

『今年は誰にもあげないよ』

「は？かずには？」

『あげないから！』

「あーあ・・・かずがかわいそう・・・」

『なんで！？』

「かずは期待してんじゃないのかなあ？  
期待？あいつが？ないない！

『それはないんじゃない？』

「ありえるかもよ！・・・考えてみたら」

かずが期待してるのかあ・・・そうは見えないけど・・・  
今年は友チヨコだけにしようとしたけどなあ。かずにもあげよっか  
な？

でも、かずはこーゆー状況嫌いだしなあ。

『あ、亜谷女からメールがきてる』

【で、決まった？】

【なにが？】

【バレンタインのこと！】

【ええ・・・?どうしよっかな?】

【私はあげた方がいいと思うー!】

【なんで?】

【1つはかすが喜ぶと思うし、2つ目はいい思い出になるんじゃない?】

【そっかあ?】

【美樹初めてだよね?男子にチョコ渡すの】

【・・・たぶんそうだと思う】

【なら、初めてのチョコはかすいでいいんじゃないの?】

【うっくん。そうだね・・・じゃあ、かすに渡すわ!】

【そこなくっちゃ!!--!!--!】

## バレンタインデー

とうとう明日がバレンタイン……まだ用意してねえ……

「美樹」

『あ、香夏子ちゃん……』

「かずにあげるんだって？」

『うん』

「うちも手伝ってあげるから！もちろんチョコは用意したよね？」

『いや……まだ』

「はあ？まだなの？」

『うん……』

「今すぐ作れっ！」

『ええ……？』

「早く！」

『はいはい。明日がバレンタインだし、明日よろしくね』

「あー！こら待てー！……！」

しぶしぶしチョコを作ってるけど・・・何作ったらいいのかな？生チョコ？トリュフ？迷う〜・・・あ、得意な生チョコでいいかな？

『よし！上出来・・・って、なにはりきってるの？？？』

これはただのチョコ！ホワイトでも期待しちゃ駄目！

2月14日 バレンタインデー

「美樹！昨日は逃げやがって！」

『ごめん！香夏子ちゃん！早く帰らなきゃチョコ作れなかったから許して！』

「まあ、かずに免じて許してやるっ！」

『香夏子ちゃんありがとう』

「あ！美樹おはよー」

『亜谷女！今日は早いね』

「うん。なんかドキドキしちゃって眠れなかったし・・・」

『亜谷女ってドキドキしちゃうと眠れなくなるタイプ？』

「そうなの・・・」

「あ、うちもそうだよ!」

『え!? 香夏子ちゃんも? うちが爆睡しちゃうタイプなんだけど・・・』

「じゃあ、昨日は爆睡したの?」

『え? いや、普通・・・』

「あつそう・・・」

呆れたように言う香夏子ちゃんと亜谷女。  
別にいいじゃん!!!

朝から女子同士でチョコを渡しあつたり男子に義理チョコを渡したりしてにぎやかだ。

・・・ハラはいつも遅めに来るから放課後に渡すつもり・・・。  
亜谷女は男子には日向くんにかあげてない。日向くんは優しく可愛いから女子からかなりの量をもらっている。  
みんな、「ホワイトデーは返さなくていいよ!」って言うてるのに  
亜谷女だけ「ホワイトデー返さなきゃ殺すよ」って、怖っっ!!!

かずが来た。チャイムとなる1分前・・・いつも来るの遅っ!

「美樹! 今渡しちやいなよ!」

『うおっ！香夏子ちゃん！今？』

「うん！今！」

『もうチャイム鳴っちゃうじゃん……それにこんなガヤガヤしてる時にチヨコ渡しちゃうとかずは受け取らないよ』

「そっかあ……それにしても、よく知ってるねえ……」

『うるさいな！香夏子ちゃんも早く席に戻らなきゃいけない？』

「あ！ホントだ！じゃあ、放課後ね」

放課後かあ……あいつ受け取らなさそう……てか、もっとやばいことが起こりそうなんですけど、気のせい？

ぶっちゃけ今授業中なのに集中のカケラさえない！そりゃ、集中できる亜谷女は相当すごいよ……

あ、川野くんの事嫌いになったんだっけ？でも、バレンタイン渡すって言ってたし……。ま、亜谷女の心臓は強いつて事にしましよっ！

## 放課後

亜谷女とかずと日向くんは同じ班。亜谷女たちは今週、図書室の掃除で、アタシは日直だから掃除はない。

『亜谷女……』

「美樹、今日かず部活ないからチャンスだよ！」

「おい！掃除しろ！おしゃべりすんな！」

「かずはづるさいなあー……自分だって日向と遊んでるのに」

『亜谷女！』

「あ、はいはい……かずを怒るなって事？」

『ちやうわ！掃除を終わらせてって事！』

「OK！はい！掃除終わり！」

「よっしゃ！日向、早く帰ろうぜ！」

「ああ！ちよつと待った！！！！」

「邪魔！」

「待つて待つて待つて！日向も手伝って！」

「なんだよっ！！！！邪魔！」      ガツチャン

「ほら！美樹早く入って！」

『ええ……てか、図書室に閉じ込めちゃってさあ……』

「早く！渡さないの？」

『てか、出そうなんですけどお?』

バンッ

「日向! 帰るぞ!」

「みんなちゃん! 追いかけてよ!」

『ええ・・・』

「みんなちゃん! 頑張つてよ! 応援してるから!」

『香夏子ちゃん・・・ありがとう!』

やっぱり、悪い予感「逃げる」って事だったのか・・・

今思ったらハラには当然な行動だね・・・そんなにうちの事嫌いかあ?

確かに1学期は悪かったけどさあ、こんなにも毛虫嫌いしなくてもいいんじゃないの?

あ、目の前にハラがいるけど・・・話しかけづらい・・・ま、保留にしましょう・・・  
なんか、悲しいし・・・

一人で誰もいない教室で座っていると・・・ ガラッ

『・・・かず!?!?』

「お前なにしてるの?」

『かずこそ・・・』

「忘れ物取りに来た」  
「今ならチャンスかも！」

『かず！これ・・・』

「・・・」

『あ、義理だからね！』

「それにしても畏まってんな」

『いいの！』

「一応もらっとく」

かずは教室から出て行った。

『はあ・・・亜谷女からメール来てる』

【今図書館なんだけど、来れる？】

【うん。行けるよ 亜谷女は渡せた？川野に】

【詳しい事は図書館でね。待ってるから、早く来て】

『なんでそんなに急いでるの？・・・亜谷女の性格か！忘れてた  
亜谷女はすごいせつかち』

## 亜谷女

『亜谷女!』

「美樹!聞いてよ!」

『聞くから、どうしたの?』

亜谷女 side

「亜谷女!拓哉が帰っちゃうから一緒に行こう!」

『香夏子ちゃん、部活は?』

「今日はないよ!早く行こう!」

『うん。・・・いた!』

「おお!早いなあ見つかるの・・・」

「あ、拓哉逃げた!」

『最悪!』

「拓哉!待てっ!」

『いや、香夏子ちゃん怖いから・・・』

「拓哉！」

「なに？」

「おお止まった！さすが香夏子ちゃん！」

「ほら、亜谷女」

『あ、はい・・・義理だから』

「でもなんで畏まっちゃってんの？・・・一応もらったとく。ありがとう」

「はあ？聞こえない！」

「ありがとう！」

「良かったね亜谷女」

美樹 side

『なんだあ、渡せたじゃん』

「良かったも何もないよ！途中で帰りたくなつたもん・・・美樹は？」

『渡せた！一人で教室にいたら偶然かすが来た！忘れ物取りに来たつて・・・』

「かず、もらいたかつたんじゃないの？」

『ええ、忘れ物って言ったよ?』

「実は、もらいたかった……」

『ないからね!忘れ物は忘れ物だから!』

「はいはい、分かりましたよ……」

『でもさあ、今日かすが図書室に入ってて、しばらく出てこなかったよね?』

「今気づいたの?かすは待ってたんだよ」

『え?なにを?』

「美樹を待ってたんだよ!だけど、みんながいて恥ずかしかったからすぐに出てきた!」

『そつなの?』

「図書室から逃げ出そうと思えばいつでも逃げられる状況だったよ?でも、渡せてよかったじゃん」

『そつだね!でも、義理って言っちゃった……』

「……」

『あ……亜谷女?』

「ありえない」

『自分だって言ったくせにー!』

「でも美樹は両思いなのに!」

『恥ずかしかったんだもん!』

「こじやって亜谷女と言い争いました・・・」

## ホワイトデー

明日はホワイトデー

『亜谷女！明日じゃない？』

「ホワイトデー？美樹は貰えるよ」

『無理無理！アタシ期待してないもん！』

「そう？日向は返してくれるね！」

『ああ、バレンタインのとき脅したもんね』

「あれは、脅しじゃないの！注文よ注文！」

そっかあ？アタシには脅しに見えたよ まあ、亜谷女がそう言うならいいんじゃないの？

でも、アタシは本気で期待なんかしてない。

3月14日 ホワイトデー

「みーき もらえた？」

『そんなに早く貰えるわけないよ・・・香夏子ちゃんおもしろい！』

「美樹は貰えると思うっ！」

『なんか、亜谷女と同じ事言うね。打ち合わせしたの?』

「してないし」

「日向! チョコ返してよ!」

「なに言ってるの? ホワイトデーとつくの昔に過ぎたじゃん?」

「はあ? なにそれ! ウケル! 今日がホワイトデーだよ?」

「そうなの!? ホワイトデーって2月15日じゃないの?」

「日向はバレンタインの次の日がホワイトデーだと思ってたらしい・・・」

『日向くん可愛い・・・』

「何言ってるの! かずが可愛いんでしょ?」

『や、そうなるとキモイから・・・』

## 放課後

運命の放課後。香夏子ちゃんや亜谷女は貰えるって言ってるけど、ハッキリいって期待してない。

『香夏子ちゃん、亜谷女一緒に帰ろう!』

「「うん」

『・・・でさあ、テレビでこんなのがあったんだよ!』  
3人で帰っていると、後ろからかすが来た。  
香夏子ちゃん、亜谷女、アタシ、かすは同じ通学路だから、時々朝  
会ったりもする。

「あ!亜谷女うちら早く帰ろうよ!」

「そうだねえ」

『香夏子ちゃん!一緒に帰るよ!』

かすはこの会話を聞いたらしくて急ぎ足で歩いていった。

「あ!美樹あそこまでダッシュして!」

「早く!」

『絶対ヤダ!普通に帰ろうよ!』  
かすは行ってしまった。

『じゃあアタシはここだから・・・香夏子ちゃんバイバイ!』

「バイバイ!香夏子ちゃん」

「美樹と亜谷女もバイバイ!」

『「バイバイ」』

亜谷女とアタシは同じマンションに住んでる。  
つい最近、亜谷女が引越したんだけどね・・・

「美樹はバカだねえ・・・」

『なんでよ』

「さっきさ、かずがソワソワしてたの気付かなかった？」

『・・・普通に歩いてたじゃん』

「あげようか迷ったんじゃないの？」

『別にくれなくてもいいもん！最初から期待してなかったし・・・でもさ、もしかず  
がアタシにホワイトデー渡すなら何渡すと思うっ？』

「指輪！」

『なんで即答？』

「かずが言ってた」

『・・・なんて？』

「ホワイトデー」なに？って聞いたら指輪だってさ」

『なんだよそれ！？ナルシー！？』

「美樹がかずと結婚！」

『おいおい！てか、その前にもらってないし用意してないと思うか  
ら！』

「そうかなあ・・・？」

## 優しさ

ホワイトデーが過ぎ、最近ハラが優しくなってる気がする……  
気のせいかな？

「日向！ホワイトデー返せ！」

「う……ん……はい」

「よろしいー！」

「じゃ、僕は……」

「なんで逃げてんだ？へえ、コーヒーストックで買ったんだ」

『亜谷女 あ、誰から？』

「日向！あいつ金持ってんじゃない」

『あ、川野がバレンタインありがとうだって！』

「……言葉で？」

『う、うん』

「殺す」

『わあーっ、亜谷女抑えて！！！！！』

キンコーンカーンコーン

チャイムさん、ナイスタイミング

「美樹給食当番じゃない？」

『あ！そうだった！また、野菜かもなあ・・・』

「野菜って楽でいいじゃん」

『どごが・・・？てか、早くやらなきゃ~~~~』

「頑張つてねえ」

あーあ・・・メチャメチャになっちゃった・・・  
量とか激しいし・・・

「美樹！給食当番は疲れるね・・・」

『うん・・・香夏子ちゃんは何の当番だったの？』

「うちはデザート！美樹は？」

『また、野菜・・・』

多分1週間ずっと野菜？なんで野菜しか割り当てられないの？おかしいって！

で、今給食食べています・・・アタシの野菜は多いけど隣の子は・・・  
誰が野菜やった？」

『え、はい！アタシ！』

「平野さん・・・量がやけに多いんですけど・・・」

『ごめん！上手く出来なくて・・・』

「ほんと！ほうれん草多いなあ・・・」  
「亜谷女のバカ！亜谷女の隣にかずがいるでしょ？聞こえちゃっつじや  
ん！」

隣の子もタイミング悪すぎ！

「ほうれん草マジで多い・・・」

「かわいそーう・・・」  
もう、知らない・・・かずに嫌われる・・・かずはドジな子嫌いだし

「はあ？野菜は体にいいんだぞ！」  
え？今は誰の声でしたか？

「かずだって野菜に手つけてないじゃん！」  
あ、亜谷女がかずに反撃したぞ！

「野菜は箸で食べるんですー！お前バカじゃん？」

「なに、美樹の肩持つてるの？」

「持ってねえし！お前の味方なんかするかよ！」

「うつざー……」

「かすがアタシをかばった？……まさかあ！ありえない！ないない！」

「ねえ、さつき美樹のことかばってたよね？」

『亜谷女もバカじゃん？誰が？』

「か・ず 違う？」

『あれは、話に入りたがってたから！』

「かすが入りたがるわけないじゃん！なに言ってるの？あれは美樹があ……」

『うるさい！もう、いいから！』

「そんなに怒らなくてもいいんじゃない？」

『普通に怒りますよ！』

「なんだかんだ今川野の話になってる。」

「川野はすつごくエロイ……本当に何考えてるのか分からない……」

・  
アタシがかずのこと好きって分かった時からかずをエロイ道に導く  
うとしてる。

かずは当然話についていこうとしない。さすがかず！

## 体育祭

そろそろ3学期も終わりに近づいて2年生になろうとしている今の頃、体育祭の準備に取り掛かっている。

「これから体育祭のチーム決めを始めます」  
アタシらの学校は不思議でクラス対抗ではなく、クラスのなかで赤とか白とかを決める。

アタシはもちろんかずと同じチームに入りたい。  
ただどかずは望んでなさそうだから、相手チームでもいい。

結局決まったチーム。かずとは離れた。そんなにショックではない。  
最初から分かりきってたから……

「美樹!!!!!!!!!!!!!!」

『うをつ！亜谷女？どうしたの？』

「男子ございー！」

『ど……どうしたの？』

「あいつらのせいー！」

亜谷女 side

『かずは拓哉チームで……美樹はどうする？』  
美樹はかずのチームに決まってるでしょ？

「じゃあ、平野さんはここね」  
「はあ？そこ、相手チームじゃん！かずのチームにしないの？？なんで？？」

「てか、拓哉もかずもびっくりしてる・・・これは錯覚じゃないよね？かずが驚いてる・・・」

「え・・・そこはやばくない？」  
拓哉ナイス！

「いやいや、ここでいいだろ？」  
男子死ね！

「は？え？なんで？俺やだし！なんで！？」

『かず・・・壊れてない？』

「お前は黙ってるよ」  
「はあ？私もあんたの味方だから！」

美樹 side

「体育祭のチーム決めてアタシをどこのチームに入れるかかなりの時間を費やしたらしい。」

「でも、かずが拒否して嬉しかった。男子さえ格好つけなければ・・・」  
「なんて、やめよう考えるだけで腹が立つてくるから・・・」

「亜谷女は調べたところ（なにを調べたんだし！）」

男子があまりにも拒否るから、拓哉もかずもそのままにしたらしい・  
でも、少しでも拒否しただけで嬉しいよ、かず

### 体育祭

「やだなあ・・・体育祭・・・運動できないし」

「香夏子ちゃんが出来なきゃ私はどうなる!？」

「ええー?でも、うちらが平気だったら美樹は余裕じゃない?」

「美樹はスポーツできるもんね!私はチームがやだ!」

「拓哉と一緒にだから?しかも、かず付き」

「そうだよ!美樹と取り替えたい!!!!!!」

『香夏子ちゃん!亜谷女!なに話してたの?』

「チームの事!」

『チーム?』

「うん美樹と取り替えたい!ってこと!」

『でも、香夏子ちゃんとは一緒だし・・・』

「私だよ！私の存在忘れてる？」

『ああ、亜谷女ね。なんで？川野いるじゃん』

「川野はもう好きじゃないの！むしろ、キモイから！……！」

「そろそろ始まらない？亜谷女とはここまで！」

『は〜い！亜谷女、じゃあね！』

「ほいほい！絶対勝ってよね！」

「頑張りま〜す！」

もちろんアタシのチームは勝った  
もちろん向こうのチームも勝った

「なあ〜んだ！余裕だったね」

ご満足気味の亜谷女

『そうだね』

ちよっとしけてるうち

香夏子ちゃんはどっかに行ってしまった

「あ、美樹！いい話と悪い話どっちから聞く？まあ、最終的には両  
方がいい話だと思うけど……？」

『ええ……？じゃあ、いい話から！』

「かずね、美樹の事すつごい探してたよ」

『なんで分かるの?』

「美樹の名前が呼ばれるたびにキョロキョロしてたもん! かずは恥ずかしがりやのくせに結構大胆な行動とるんだね」

『そつかあ? で、悪い話は?』

「悪い話は、美未がかずに抱きついた事」

『はあ? 抱きついただとお?』

「でもすぐにかずが振り払ったけどね」

『え、まって! 詳しく説明して!』

「最初、かずが立ってたたのね、美未が友達とジャれてるフリして、キヤーッと叫びながらよろけたフリしてかずに抱きついて2人とも地面に叩きつけられたの! 2人の顔近かつたし!」

『・・・で?』

「もちろんかずは美未が嫌いだから思いっきり振り払ってまた美未が地面に叩きつけられたの!」

『なあ〜んだ。良かった』

「あれが美樹だったらかずはキスしてたなあ・・・」

『はっ。』

「もったいない・・・」

『いや、そんな行動かずは取りませんから・・・』

「あーあ・・・美樹がかずのチームだったらなあ・・・ほんとっ  
！男子のせいだよ！」

## 終了式

「そろそろコクンない？」

香夏子ちゃんがせまってきた

『コクるの？早くない？』

「は？早いつて遅いよ！」

亜谷女もせめてきた

『遅いのかな？まだ平気なんじゃん？コクってもフラれるだけだし・・・』

「いいや！絶対両思いだから！」

2人で声合わせるなよ・・・

告白かあ・・・やろっかな？

そう思ってた日から何度もコクろうとしたけど・・・お互いの事情でなかなか一緒に帰れない。コクろうとした日から3週間が過ぎた。あまりにもコクるチャンスが訪れない。なんで？

「美樹・・・さっさとコクれや！」

イライラ気味の香夏子ちゃん・・・

「まだコクれてないの？」

少し呆れ気味の亜谷女・・・

「コクるなって警告されてるじゃん？コクらない方がいいんじゃないの？」

止めようとしてる美末・・・

本当にコクった方がいいのかな？

あと2日で終了式。なにかもが終わり、2年生に進級する日。もちろんクラス替えもある。

亜谷女とアタシは絶対に離れると思う

美未とアタシは絶対にくっつくと思う

川野と亜谷女は離れると思う

アタシとかずも離れると思う

とにかく、クラス全員がクラス替えを嫌がっている。

『今日、コクる！』

初めての決断

「本当に？絶対だよ！」

嬉しがる亜谷女

放課後

そろそろ終了式のため、部活は吹奏楽部以外休みだ。

「遅い・・・」

『亜谷女もちょっと待ってくれない？』

「かずは一体なにやってるの？」

『・・・なあ？』

「ああ！！！！来た来た！！」

『！！！！！！な・・・なに！！？』

「早くコクつて！私は隠れるから！」

『え・・・ええ？』

どうしよう・・・コクる？コクらない？

せっかくのチャンス無駄には出来ない・・・

・・・コクるorコクらない・・・

『はいよ！コクらない！』

「ああ！？」

『逃げてきちゃいました・・・』

終了式

「美樹おはよー！」

『あ、香夏子ちゃん おはよ・・・』

「どうしたの？昨日コクった？」

『いや・・・』

「ええ！なんで？」

『詳しい事は亜谷女から聞いて……アタシからはとても……あーあ……学校行きたくないなあ……』

「美樹！」

『あ、香夏子ちゃん……聞いた？』

「スルーしたらしいね！」

『うーん。だって怖かったもん』

「そんなかすは襲って食べるわけでもないから……」

『いや！あれは食べる目だった！』

「別に……い……食われてもよかつたんじゃん??」

『えっ?やだよ』

「ふっ！違う意味でね」

『違う意味……?ヤラシィィィィ！そんなら普通に食われた方がマシだから!!!!』

「美樹！一緒にA組に行こうよ」

『あ、亜谷女・・・』

「いいよ！うちはやる事あるから、2人で行っておいで」

「美樹！早く行こう！」

『なんでA組に行くの？』

「CDを貸さなきゃ行けないから」

『ああ・・・あれね』

アタシの学年で今1番人気のCDを亜谷女と香夏子ちゃんを中心に貸し借りしてる。

限定版でもってる人は数少ない超人気のCD

あ、アタシはもちろん持つてるよ

「あれ？いないなあ・・・？」

『誰探してるの？』

「ん〜？いない・・・」

無視ですか？あれ？誰だろう・・・？光の反射で・・・

『かずだ！！！』

「え？本当だ！」

『隠れさせて！！！！！！』

「駄目！向こう行け！」

『亜谷女の意地悪！！！』

「あ！逃げるな！ごめんね？かず」

「……………」

「ありや、美樹？用事は済んだの？」

『香夏子ちゃん…………かずが…………』

「かずが？」

『かずが来た…………』

「はあ？何それだけで驚いてるの？」

『だってさ、昨日の事もあったじゃん！！！！』

「だからこそ、今日は頑張るの！全く……………」

『ゲッ！来た！』

「…………朝からドツタンボタン忙しいね…………ま、美樹らしいよ」

終了式が終わり、このクラスでいられるのもわずか1時間30分…………1秒1秒時間が過ぎて行き…………

キーンコーンカーンコーン

「はい、号令！」

先生の合図で立ち上がった。このクラスのリーダー的存在の香夏子ちゃんは、

「皆で歌歌いましょうよ！」

もちろん皆は……

「賛成！！！！このクラスでいられるのも最後だしな」

歌った曲はR Y T H E M【ハルモニア】

途中で帰った人もいたけど、最高の1年間だった。

このクラス、そしてこの教室にありがとう。そしてごめんなさい。

## 春休み

春休みが始まった。

この春休みが終わればうちはもう中学2年生……

『そー言えば、今度の1年生性格が激悪だったっけ？』

2年生になるのやだなあ……クラス替えあるし……  
春休み中は毎週（水）と（日）しか遊べない。

アタシが遊べないんじゃないかと、一緒に遊ぶ人が亜谷女しかいないから

亜谷女はで毎週（水）と（日）しか遊べないのだ

【いい加減コクらない？】

亜谷女からのメール

【そつだな……あの時思いつきりスルーしちゃったよね？】

【最悪】

【でも、かずも逃げてなかった？】

【それは、かずは私に気づいたからだよ！本当に鈍感だね！】

【そーゆー亜谷女も鈍感なところもあるよ！】

【ところで、（水）！忘れないでよね】

【はいはい！うちは絶対に忘れないから！特に遊びはね・・・】  
(水)にコクろつかな・・・？それとも(日)にする？

水曜日

『ごめん・・・遅れました』

「遅くない？かずからきた？」

『きてない』

「私も来てない」

『ま、別にいいんじゃないの？』

「そうだね！・・・コクる？」

『え？・・・どうしよっかなあ？』

「コクつちやえば？」

コクるって言っても電話かメールだよね？

『ねえ、亜谷女』

「ん？」

『80円もあれば電話できるっ？』

「そりゃ、もちろん」

『・・・やっぱやめた!』

「ええ・・・?」

『ほら!次行こつ!次!』

はあ・・・結局コクれなかったなあ・・・日曜日コクろうかな・・・

日曜日

亜谷女と話してたら、携帯の着信音が鳴った。

着信：可愛い日向くん

『もしもし?』

「今なにしてた?」

『今?えつと・・・「1人」』

『え、・・・1人だよ?』

「好きな人いる?」

え、なんて答えればいい?

こっちは、正直に!

『ころよ』

「俺もいるよ」

『え、誰!?!』

「……平野さん」

『へえ……平野さん……ええ!?!』

「平野さんは?」

え、どうしよう……

アタシはかすが好きだから、

『ごめん!アタシ日向くんは友達としか見てないから……ごめん

!』ピッ

「なにコクられてんの!?!」

『え、聞こえてた?』

「顔を見れば分かる!」

『うっ……ん』

それから、日向くんからメールも電話も来なくなった。

私は、酷い事したんだなあ……可愛くて、優しい日向くん  
人としても、男としても、文句がつけられないのにアタシなんかに  
恋しちゃって……

日向くんには傷をつけて欲しくなかった。



## 新学期

いろんな思い出があつた春休みも終わり、うちは2年生になつた。で、ゆーか1番気になるのつてクラス発表じゃない？

『亜谷女！クラス発表！』

「あ！美樹！私達つて絶対離れない？」

「この学校は仲のいい子達を離す学校だ。クラス、どうなるのかな？」

「美樹！」

『うおっ！驚かさないでよ』

「美樹、私達同じクラスだよ！」

『嘘！マヂで！？ありえない！』

「ちょっと、プリント見せて！」

『あ、本当だ！A組！』

「あああ！拓哉と離れた！」

『え、待つて！美末と川野も離れたじゃん！』

「よかつた」

『アタシ、かずと同じクラスじゃん』

「本当だ！いいなあ・・・」

『今回のクラス替え最高！』

新しいクラスに着いて、席に着いた・・・これってありえない

『亜谷女・・・』

「うん？おお！」

『フフフフ・・・最悪だよ』

アタシの隣の席・・・かずだよ！右半分が異様に固まってるんですけど？

でも、3日間だけだから！平気・・・かな？

新しいクラス。満足はしてるけど、日向くと離れてしまった。春休み以来顔もろくに見ていない。

日向くんはかずと1番仲がいいし、かずは日向くと1番仲がいい。なのに、2人はクラスが違ってしまった。

3日後

この3日間、長かったような、短かったような・・・？  
そんな事はどうでもいい！早く席替えしたい！

「美樹！お待ちかねの席替え終わったね〜」  
亜谷女・・・ムカツク

『席替えの意味ない・・・』  
アタシの隣・・・またかずだ。

アタシの班は6班。  
おがわ みその小川聖園かず たかはし ゆうか高橋優花アタシの班だ

聖園は勉強が出来る。今時の優等生  
優花はクラスモテる方。スポーツが出るかつこいい女の子。

ん？この班パーフェクトな女子多くありませんか？アタシピンチの  
予感！？  
かずって優花みたいな子が好みだし、聖園のこと好きになってもお  
かしくない！

新しいクラスになって1週間目。もう、諦めようかと思う。え？何  
をつて？ハラの事だよ。何でつて？焦らないで！教えてあげるから。  
・・・

## 思い出

「おい、あれってどうやるの?」

アタシはこの声に1番びっくりしたね。だって、かずの声だもん。

「知らねえー!自分で考えろっ」

いっつも、こんな感じ。かずと優花が楽しそうに話してる。

なんで?アタシの時は無視するくせに・・・優花の事好きなの?

「美樹、すごい被害妄想・・・」

『妄想してない!』

「よく考えてみ?かずがあんな短期間で人を好きになると思っ?」

『・・・思わない』

「積極的に話しかけてみたら?」

## 給食

「なんかさあ、これヤバイ!」

「ヤバイヤバイ!涙出るし!」

楽しそう・・・あの会話の中には入れないよね?

「原田!笑いすぎ!」

「頭いてえー！」

「原田やばすぎー！」

「ふ・・・腹筋があ！」

いつもなら笑ってしまつ様な会話。何故か笑えない。

掃除

「原田！ちゃんと掃除しろっ！」

「してますよーだ！」

してないくせに・・・アタシが言ったら完璧無視だね。

いいなあ、優花はかつこいいもん！男子と話しやすい・・・

なんか、優花も一緒にかずとぶざけ始めたし・・・どうすりゃあいいの？

「美樹！」

『ふえっ！亜谷女・・・』

「いいの？あのまままで」

『しょうがないじゃん・・・無理だよ』

「美樹！」

『あ、優花』

「今日うちが廊下掃除でいい？今日の当番美樹でしょ？」

『いいよ！助かる』

「ありがとー！さすが、美樹！じゃあ、行って来るね」

おお！予想的中！優花って女子同士でも話しやすい あんな友達1人ぐらいいいなきゃね

『亜谷女！アタシがこの列やるから、亜谷女は向こうやってね』

「うん。任せて！すぐに終わらせるから！」

『了解』

それにしても、今代理で亜谷女が掃除してくれてるけど聖園どうしたんだろ？保健室って聞いた気が・・・ ゴンツツ！！！！

「ああ・・・」

なにこの鈍い音！声はかずつて分かるけど・・・

「痛っ！原田！」

「ごめんなさい」

「わざとでしょ？」

「いやいや！違うよー！」

「今の絶対わざとだ！」  
かずと優花の会話。

「今、何があったの？」

『さ・・・さあ？』

「優花！どうしたの？」

「うん？戻ってきたら、原田が押ってきて机に当たった・・・痛い・・・」

『大丈夫？保健室行く？着いてつてあげるから・・・』

「平気だよ！こんくらい！ほらっ！早く整列しなきゃねっ」  
優花が羨ましい。

1年の1学期、優花のこの立場はアタシだったのに・・・

それから、かずと優花の仲はみんなが羨む程仲良くなっていた。かずは、優花の事好きかもしれない。でも、優花は他の人が好きなのに・・・最近、かずはアタシの存在すら忘れるようになっていった。さすがにこうなつて来ると、腹が立ってくる。

次の日

「美樹！おは・・・」

『亜谷女おはよっ！どうしたの？』

「どうしたじゃないよ！メイクは？」

『ああ、メイクやめたよ!』

アタシはかすとの思い出を消すために、これからノーメイクでいる。アタシが今まで目がつって見えたのは、アイカラーとビューラーのせいだろう・・・

「あれ?美樹!久しぶり!」

『あつ香夏子ちゃん!』

「ノーメイク?」

『うん!』

「なんか雰囲気変わったあ!」

『本当?よかったー』

「でもなんか迫力がない・・・」

『え?どんな?』

「・・・なんでもない!」

## 1回だけ

2年生は移動教室があるらしい・・・

今日はそのための席替えなんだけど、

アタシは5班

かずと美未が4班

亜谷女が1班

かずと離れてよかった・・・でも美未とかずが同じ班

「かずは美未のこと嫌いだよ？」

『でもさー・・・』

「平気だって！今までかず美未のこと無視してたし！」

ある日

「ねえ、かずはどっつ？」

「お前こんなのもできないの？」

「うるさいなあー！いいでしょ？」

「かずじゃあこれ・・・」知らない

なに？美末のこと嫌いなくせになんで亜谷女のごとは無視するの？  
1年のとき美末のこと嫌いって言ってたじゃん・・・  
亜谷女も平気って言ってくれた・・・

なんで？

『かず、普通に美末と話してたじゃん・・・』

「私もびっくりした・・・てか、私のこと無視してたよね？」

『・・・美末のこと好きなんじゃないの？』

「それはないよ！あのブリッコだよ？」

『でも2年生になってから美末あんまりブリッコしなくなったじゃん  
ん』

「そっか・・・」

美末とかずの仲は日に日に仲良くなっていくばかり

今は2人で登下校しているらしい・・・

「かず美未と付き合ってるの?」

「付き合ってるねえしバカじゃん?」

「じゃあなんで一緒に登下校してるの?」

「お前に関係ない」

「あ、かず待つてよ!・・・」

『ほらね』

「なんで?・・・」

『いいよ・・・アタシ諦める』

「え、ダメ!なんで!?!」

『かず・・・美未のこと好きだよ』

「それは高橋さんのときと同じ錯覚だよ」

『登下校っておかしくない?かず今まで部活サボったことないのに美未と帰るためにずっとサボって部活退部になったんだよ?亜谷女知らないでしょ?』

「そ、そんな・・・1回だけ粘ってみて？1回だけ・・・」

1回だけ・・・

『いいよ』

美未は亜谷女の恋を邪魔した。

今度はアタシの番だ。もう奪われそうだけどね・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1858c/>

---

好きでごめん。

2010年11月21日03時00分発行